

---

# エンドレスレース

スティーブチェイス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンドレスレース

### 【Nコード】

N5712B

### 【作者名】

ステイプチェイス

### 【あらすじ】

横浜で開かれたとある陸上記録会に新一たちがエントリーしていた。しかし、この記録会は5000mしかないおまけに一堂に加え、実力者がそろってきた。激しい心理戦のもとトップでフィニッシュするのは…

## 戦いの始まり（前書き）

この小説には私が作成したオリジナルキャラクターが多数出現しています。陸上の長距離種目では多数エントリーしていることが多く、またフレンドリーな大会にしたいという思いで、オリジナルキャラクターも多くなりました。そのところはご留意いただければと思います。

## 戦いの始まり

「続いてのトラック種目は本日最後のレース、男女混合の部5000m走決勝です。プログラムは15ページ。出場選手につきましては電光掲示板をご覧ください。」

時刻は夜の7時。天気は快晴で星空が輝く。まもなく始まる群雄割拠のサバイバルレース。長距離の目玉種目でもあるのだ。さてその出場選手は以下のとおりである。（見方は選手と所属。持ちタイムは記載なし）

- 1 工藤新一（帝丹高校2年）
- 2 服部平次（改方学園高校2年）
- 3 高木ワタル（警視庁捜査一課）
- 4 毛利蘭（帝丹高校2年）
- 5 京極真（杯戸高校2年）
- 6 黒羽快斗（江古田高校2年）
- 7 遠山和葉（改方学園高校2年）
- 8 佐藤美和子（警視庁捜査一課）
- 9 千葉（警視庁捜査一課）
- 10 長島茂雄（港南高校3年）
- 11 稲尾一久（大金高校3年）
- 12 鈴木園子（帝丹高校2年）
- 13 双葉隼人（東北修栄高校2年）
- 14 後藤秀基（帝丹高校1年）
- 15 中津翔太（帝丹高校1年）
- 16 持川広斗（帝丹高校1年）
- 17 灰原哀（帝丹小学校1年）
- 18 小嶋元太（帝丹小学校1年）

- 19 円谷光彦 (帝丹小学校1年)
- 20 吉田歩美 (帝丹小学校1年)
- 21 毛利小五郎 (毛利探偵事務所)
- 22 十亀大輔 (神奈川・聖教第二高校2年)
- 23 中岩剛史 (静岡・太平洋高校2年)
- 24 辻大樹 (静岡・太平洋高校2年)
- 25 街田駿祐 (港南高校1年)
- 26 宮本由美 (警視庁交通課)
- 27 米原雄大 (岐阜県警機動隊)
- 28 平山一彦 (岐阜県警機動隊)
- 29 榎本梓 ( - - - )

29名がエントリーしていた。この中で何人が走れるのか?というメンバーもいるが、多めに見ていただきたい(灰原は棄権したがっていたが、工藤に説得され結局出場することとなった。)

出場者29人バックストレートにおいて流しを入れる。その頃、なにやら怪しい会談をしている人間がいた。どうやら予想屋らしい。その話を聞いてみることにした。

A:「今日の目玉は誰だ?」

B:「見る限り、工藤君とか服部君とかが優勝候補じゃないの? つてかこれ小学生やおっさんも走るんだ。大丈夫なのか。」

A:「俺たちには知ったこっちゃない。とにかく優勝予想だぞ、気になるのは。」

この予想屋がいつているとおり、5000mは俗に言う5kmだ。持久走大会で走ってる高校生以上ならまだしも、少年探偵団ではいくらなんでも厳しいものがある(ただ小五郎ももはや運動不足レベルだが...)。

それを考えると新一や平次はもちろんのこと、名前を聞いたことのない人間にもチャンスがあるということでもある。女性では蘭、和葉、佐藤刑事の名前が上がってくる。

流しも終わり、出場者は一斉にスタートラインにつく。競技場内は緊張感に包まれる。そして…

「パン！」

群雄割拠のサバイバルレースが、今始まった。

## 戦いの始まり（後書き）

一口メモその1

一般に長距離種目といわれるのは1500m、3000m、5000m、10000m、3000m障害、競歩、マラソンがある。このうち3000m以外の種目は五輪正式種目になっている。ちなみに、私のペンネームは3000m障害の英語読みを一部もじったものである。

## 心の読み合い

これから長い長い戦いが始まった。

「まず先頭飛び出したのは、2番は服部君、6番の黒羽君、13番の双葉君、23番の中岩君。その後は集団状態。」

早速アナウンスがあった。抜け出したのは4人だった。

「おい、工藤なんしてんねや」

「みなさん、先に行かせていただきますよ」

「陸上部の意地としてもぜってえ、負けられねえ」

早速、意地のぶつかり合いが始まった。

先頭集団の4人は400mを77秒で通過する。後ろも2つの集団に分かれ、前の集団は大体80秒前後といたところか。後ろの集団を引っ張っていたのは予想通り和葉と蘭と佐藤だった。この集団が93秒で通過している。そんな中、早くもレースをやめた人間が……いた。

毛利小五郎その人である。なんと300mでレースをやめてしまったのだ。不規則の生活が影響したか。観客は笑いの渦だ。

「何をやってるんだね毛利君は。もう終わりか……」と観戦していた目暮警部は頭を抱えた。

レースは1000mに差し掛かる。通過タイムは3分14秒。多少落ち着いたか先頭集団は4人に加え、新一、長島、街田を加え7人になった。さらに10秒遅れて第2集団。ここには高木ら大半の男

子選手で形成。その後ろに3分50秒で蘭、和葉、佐藤に加え千葉もいた。

「遅いやないか工藤、やっときたか」

「バー口。早くから飛ばす馬鹿がいるか？」

「それを戦法としてる人間もいるはずだ！」

「さあ、どうするここから」

先頭集団は完全な心理戦が始まった。その後ろでも…

「この2人はどうするつもりかしら。明らかに飛ばしすぎてる」

「この2人めっちゃ余裕やん。どないしょ？」

「待つて、新一…」明らかに蘭だけがおかしい。

そうこうしているうちに、途中棄権者が続々。すでに残りは23人になっていった。

先頭集団にも変化が出始めた。あまりのペースの速さに隼人と長島が遅れた。だした。

「明らかに速すぎる。こいつらどこまで行くんだ？」2人はそう考えていた。

この2人の足取りは確実に重くなっていた。

「さあ、先頭はまもなく2000m 6分33秒、この1000mは3分19秒、若干ではあります。ペースが落ちてます」

「じゃかしいわ。ボケ！」（ハア、ハア）

「どこで仕掛けようか…」（ハア、ハア）

明らかに選手たちの余裕はなくなっていた。

「そして、女子の先頭は…7分37秒。この1000mは3分47秒。ペースが上がってます。」

「何〜〜〜〜！！！！」観衆がどよめいた。この1000mで大半の

選手のペースが落ちているというのに、この3人だけは逆にペースを維持しているどころか、上がってきているのだ。

「女子の先頭集団は3名。8番の佐藤さん、4番の毛利さん、7番の遠山さん。というより、女子はこの3名しか走っていません！」  
なんとこの3人以外の女性選手は全員途中棄権してしまっていたのだ。

「最下位は嫌や！勝ちたいんや！」

「警察としても負けるわけにはいかないわよ」

「助けて、新一…」依然として蘭だけはおかしい…

レースはまだ序盤が終わったばかりだ。

## 心の読み合い（後書き）

一口メモ2

今回登場しているオリジナルキャラクターは「ふんだりけつたりのゲーム大会」に登場した隼人以外は全員が陸上部という設定とされている。ちなみにこのうち中津翔太は新一や蘭と同じ小学校と中学校を卒業している。

## 最初の正念場

先頭集団でも変化が起こり始めていた。ペースが上がらない。ここ  
のところの1周は80秒ほどかかっていた。そして、やはり陸上部  
であるからか、中岩と街田が抜け出した。街田は地元の港南高校と  
いうこともあり、ひととき声援が大きかった。

「マチ、そこから引き離せ！」港南高校の関係者らしい。

「（わあってますよ、監督さん）」さらにペースを上げようとして  
いる。しかし、街田の呼吸も荒くなってきた。

「（しかし、探偵さんの2人もまだ落ちてないみたいだ、早く引き  
離さないと…）」一方の中岩のほうはかなり焦っていた。陸上部で  
あるとはいえ、新一と平次の運動能力についてはある程度把握はし  
ていたからだ。

2400mを通過し、先頭は中岩と街田の2人。それを新一、平次  
らが追う。すでにペースダウンした隼人と長島は高木らの集団に吸  
収された。

一方の女性トリオも、先ほどの勢いはなく、3人ともペースがダウ  
ンしていた。既にトップ争いとは1周以上離されている。

「（平次…、平次おらんやん！？何してんねん！）」ハア、ハア」

「（高木君…、何をしてるのよ、も〜）」ハア、ハア」

「（新一…、何で放っていくのよ〜）」ハア、ハア」

もはや自分たちの争いというほどではないようだ。むしろ、トップ  
集団に新一らがいないことを気にしていた。

「さあ、先頭集団は2名、中岩君と街田君。それを追って、工藤君  
と服部君らが追っかけています！この1周は-79秒。先ほどより

ペースが上がりました。そして後ろの集団もペースが上がってます。

「（まずい、このままでは陸上部としての面目がつぶれてしまう…）  
ハア、ハア」先頭の2人はそれを考えていた。

「新一く〜ん。がんばって〜！」

「平ちや〜ん！」

ここは横浜だ。にもかかわらず、工藤や服部の声援のほうが多かった。やはり名が知れ渡っているからであろう。そのことに街田が苛立ちを募らせ始めた。

「ふざけんじゃね〜よ！俺の地元だ！工藤らにやられてたまっかよ  
！」

さらにペースが上がろうとしていた。すると1周遅れしようとしてたところに声が聞こえた。高校の先輩の長島だった。

「おい、あんまかつかするな！相手は名探偵だぞ！」

その言葉で街田は我を取り戻したか、ペースは推移していった。

トップが3000mを通過する。先頭の2名は9分57秒。後ろの集団は5秒遅れて続く。さらに後ろは40秒ほど遅れていた。ここまででさらに棄権者が出たらしく、ペースが明らかに落ちていた千葉と実は足を攣っていた長島が大事をとって棄権した。その3000mを過ぎて、集団から抜け出そうとした平次とさらに1周遅れされた和葉がすれ違おうとしていた。そこで和葉はとっさに髪を結んでいたリボン解いて平次に渡した。

「平次、はよ追いつかなあかん…これ、力にして！」

「和葉、お前余計なこと…分かった。絶対1位でゴールしたる！」  
そういうと平次はリボンを受け取り和葉を1周遅れにした。その瞬間だった。

「どきな！」

声の主は快斗だった。すぐさま快斗は集団から抜け出し、前の2人に追いつこうとしてた。さらに、それを見て、新一や平次もついて



## 最初の正念場（後書き）

一口メモ3

今回のラップタイムとフィニッシュタイムの基準について、今回レースに出場した（途中棄権）光彦君に説明してもらいたい。

「えーつとですね、トラックは1周400mで行われまして、1000mは2周半になります。今回の先頭集団のペースは1周80秒前後、これを計算していきますと5周（＝2000m）で400秒前後、これを分単位に直しますと、6分40秒で、それを半分にしますと、1000mは3分20秒になります。つまりこれを5倍にすればいいわけで、フィニッシュタイムは16分40秒となります。これは僕から見ますとかなり速いタイムになります。参考に3000mは10分ちようどです。これを速いかどうかは読んでいます皆さんの考えにお任せします。」

勝負勘が冴えてたのは…

トップが3000mを通過した時点での結果をここでおさらいしておく

街田と中岩が抜け出たところを新一、平次、快斗が追いつき、40秒遅れで第2集団。ここは十亀が仕掛け、真と隼人がつき、他のメンバーが躊躇している。前では触れられていなかったが、稲尾はすでにこの集団から離脱して、20秒近く後ろに下がっている。女性は佐藤、蘭、和葉が依然として競っており、この3人は先頭からは2周遅れされている。そして長島、千葉、少年探偵団、上記の3人以外の女性、小五郎はすでにレースを取りやめている。

- 第1集団 -

「な、何だと！こいつらかなりタフだな。」街田はそう思いながら、後ろの3人を見た。

「あんちゃん、すっかりつかせてもらうぞ！」

「わりいな。最後に勝つのは俺だから」5人での心理戦が再び勃発した。

- 第2集団 -

「頑張ってますね。」

「当たり前だろ！こう見えてもピッチャーやってるからスタミナには自信あり、つてことかな。しっかしはえ〜な。聖教のヤツ」

「こら、待て！」こちらは真と隼人と高木で心理戦ならぬ、心の会話が始まっていた。

- 第3集団 -

「ちょっと和葉ちゃん、髪の毛邪魔！」

「なんやて！絶対髪切らんで。短いの合うわけないやろ。蘭ちゃんやて一緒や。」

「も〜2人して！」和葉が髪を下ろしたことにより、蘭と佐藤が迷惑がっていた。かという蘭も下ろしてはいるのだが。

心理戦が勃発したのか、各集団ともペースが上がらない。このままでは記録がしらけてしまう。すると予想屋がこんなことを言っていた。

A：「なんだ。結局ボロクソ記録か。これは記録会というのに…」

B：「普通、記録会は自己ベストの更新のためでしょう。なんですか、この有様」

A：「よりにもよってどの集団もこんなようでは…」

B：「逆に言うと、予想がわくわくしません」

A：「確かに。これで工藤君や服部君も苦しくなったな」  
予想屋の言うことも一理ある。

ところが、その後、ものすごいことが起こってしまった。

「先頭は依然としてこの5人。牽制が続いて…あ、」

次の瞬間、一体何人がこんなことを予想したのだろうか。否、いはいはずだ。

「蘭…」 「か、和葉あ！！？」 「くっそ、さっき抜かしたっつ

のに！！！」

「一体どつからこんな体力…ドーピング!? なわけね〜よなあ。」

「な、なんと佐藤さんと毛利さんと遠山さんが先ほど抜かされた先頭集団に追い付き、一気に抜き去りました〜！！何ということでしょうか！」

予想だにしない出来事だ。女性3選手が先頭集団に追いつくという、とんでもないことをやってしまったのだ。アナウンスも声が裏返るはずだ。このアナウンスを聞いて、驚いたのは観衆と先頭集団だけ

ではない。

「蘭さん…」 「あいつらいつからこんな馬鹿みたいに…」 「さ、佐藤さん!？」

「ちっ、抜かされそうだ…」 走っていた全選手（残ったメンバー）も一同びっくりしていた。

それもそのはず、先頭や第2集団とは違い、心理戦以上の熱い戦いを繰り広げていた。しかも、よくよく見ると…3人とも半泣き状態だ。それはラップを見ても分かる。先頭集団は84、5秒で第2集団が88秒（ただし十亀だけはそれよりも2、3秒速い）で維持するだけでも一杯一杯なのだが、なんとこの集団はそれよりも速いペースで行っていた。普通では考えられない。だが、高校の陸上部きつての分析家である中岩だけはそれに対し冷静だった。

「この人たち、無理にペースを上げ下げしてるから、足に乳酸がたまって、動かなくなる。そのときに勝負の分かれ目になりそうだな。」

蘭ら3人のペースがガクツと下がったときが仕掛け時と見ていた。それまではこの4人にぴったりつくという作戦である。

中岩の予想は奇しくもその直後に的中した。そのご蘭たちはペースが上がっていかないことに気がつく。

「えっ、ちよつと、どうしたのよ…足が、動かないじゃない!」

「なんでや、もうわからへん。嫌や…」

「何なのよ…この痛み。全然動かないじゃない!」

「しめた!」 中岩は満を持して仕掛ける。ところが…

「何っ!」

「オーツとここで、工藤君と服部君と黒羽君の3人が前に出ました!しかも急にペースを上げました。これは先ほどの3人と後ろの2人もついていくことが出来ません!」

中岩が予想していたところで、実は新1ら3人も仕掛けていた。

「やっぱり！これが名探偵なのか…ああ、恐ろしい」

しかし、必死にっこうとする街田と中岩だ。

「こいつだけには負けられない。」2人してトップの3人を追うつもりだ。

その後ろでも中岩の予想が的中してしまった人物がいた。

「うっ、いつてえ〜〜！！！」完全に足を押さえていた。高木である。

「高木さん、無理が祟ったみたいですね。よし、京極、勝負だ！」

「望むところ！」7位争いはこの2人に絞られた、に見えたが…

「さあ、7位争いは高木君が遅れ、その後ろからなんと黄色いユニフォームが3人。おそらく帝丹高校の3人でしょうか。」高木の代わりに帝丹高陸上部の3人が2人に迫ってきたのだ。

「何だと、余計な…」こちらの争いも面白そうだ…

勝負勘が冴えてたのは…（後書き）

さて、この長距離レースは一体どうなってしまうのか？出来れば、次回作公開まで予想するのもありかなと…

読んでいる皆さんありがとうございます。

昨日から書き始めてます。あ、私は基本レギュラーメンバー全員の絡み（オールスターみたいな感じ）が好きなので、基本としてそれを中心に書こうと考えてます。

今回からネタが切れてしまったので、一口メモはありません…

## NEVER GIVE UP (前書き)

ここまでの通過を振り返ると

先頭集団はまもなく4000mを通過しようとしているところで、新1ら3人が陸上部の2人を引き離そうとしていた。その後ろには十亀が続き、第2集団は隼人と真に帝丹陸上部がついた。高木は無理が祟って遅れてしまい、稲尾はマイペースで足を進めていた。一方の女子は2周遅れになりながらも、蘭、和葉、佐藤と3者譲らずのレース展開を見せている。

## NEVER GIVE UP

「何だと、余計な…」

隼人は迫ってくる3人に対し、強くそう感じていた。真との勝負に持ち込む作戦がこれでパーになった。

「逆に3人に引張ってもらったらどうです？」

真は隼人に対して言ってるかのように暗示をした。しかし、隼人は全く受け取っているとは思えない。むしろ自分で行こうとしていたが、逆に後ろにぴたつと4人がつく。この時点で帝丹高陸上部3人も追いついていた。しかし、さらに予想だにできなかったことが隼人を襲う。

なんと前では女性3人衆がもがき苦しみながら走っていた。この状況次第では置いていかれる可能性が高い。

「くっそ、邪魔だ。あいつら変に飛ばすからだろ ったくよー」

この集団もあまりにもペースの上げ下げがひどかった。それを気にしてか、隼人はかなりぴりぴりしていた。前の3人はペースダウンがひどくすぐに追いつかれた。そして、隼人は追いつくやいなや、すぐに言葉を発した。

「お前ら、無理して争うからだろ！とにかくそこをどけ！」

ところがその言葉が3人の争いを激化させたのは隼人もそしてそのほかの人もこのときばかりは知る由もなかっただろう。

一方先頭集団。

「何やねん、黒羽のやつ。いきなり上げよって。」

「どうすりゃいいんだよ。」

「どうしたんだ2人と。スタミナが切れたのかい？」

女性3人のペースダウンを機にいきなり仕掛けた3人。そして、4000mを通過する。競技場ボルテージが一気に上がる。

「さあ、先頭の3人：4000mの通過が - - 13分25秒。この

1000mは3分27秒！さすがに牽制しあつてたせいか、ペースダウンしています。このまま行きますと、17分切れるかどうかというタイムです！さあ、先頭の皆さんがんばって行きましょう！」

「13分半やてえ！あかん、もうチヨイ早よいかな。」

先頭集団にも焦りの色が出始めた。それもそのはず、街田と中岩の2人も2秒しか離れず、ついてきている。

「まずはこいつらからだな。」

新一はまず、陸上部をつぶしておいてから、平次と快斗との対決に挑む公算でいた。ラストのスピードは少なからず2人よりも自信があるのと踏んでた新一の作戦だろうか。しかし、2人もそう簡単にやられることはない。すると中岩が後ろを見る。

「やべっ！亀（十亀）が後ろから来てる！」そう、第2集団から抜け出した十亀が近づいてきた。とはいってもまだ30秒と少しの差がある。ただ、ラスト勝負に自信がなく、研究者である中岩は十亀が来ているのを肌で感じていた。実際にこの2人は、1500mでも一度対戦しており、ラストで50m近くあつた差をラスト200mでひっくり返された苦い過去をもつ。

しかし、それ以外のメンバーも十亀が近づいてきているのをアナウンスで確認できた。

その時だった。

「っしゃあ！」

威勢よく声を上げたのは平次だった。行かしてもらおうで！と言わんばかりに。

「おい、どうしたんや工藤。もう限界なん？」

平次は新一を気にしながらペースを上げた。その声は後ろの集団にも聞こえた。

「何っ！服部のやつ仕掛けた…しまった！」

まず第2集団は隼人が油断をしていた隙に、帝丹の3人を先を行かれていた。当然真からも遅れる。ついていこうとするが、無理をし



NEVER GIVE UP (後書き)

ラスト1週の鐘が響き一体どうなってしまっのか…衝撃のラスト展  
開に、観客が騒然…!?

## 思わぬ結果（前書き）

就活等で1ヶ月間、手がつけられませんでした。  
急いで書いたので、かなりぐだぐだになっていますが、ご了承ください。  
さい。

## 思わぬ結果

カラカラカラカラカラカラ~~~~ン!!!

「さあ、鐘がなりましてあと1周となりました!」

平次を先頭に400mのスプリントレースが始まった。しかし、快斗と新一もつく。中岩と街田も先頭集団につくが、先頭集団はもはや、全員余裕がなかった。そここうしているうちにまたゴールまでの距離がなくなっていく。後ろには徐々にではあるが、十亀が迫ってきていた。

「みんなここからしんどくなるはず、まだ追いつけない距離ではない!」

そう思ううちに、十亀は後1周の鐘を聞き、猛追していった。

その20秒開いて、真と帝丹高校3人衆、そして隼人が追いついてラスト400mを迎えた。

「追いついた。ここから勝負だ!…えっ!?!」

隼人は足の異変に気づく。そここうしているうちにまた4人に遅れをとってしまう。そうになると…

「まずい、この3人に凹にされる!」

動かない足を必死に動かした。

「先頭集団はさあ4800m。16分13秒!このまま行けば16分50秒は切れそうです!」

先頭集団は残り200mを切っていた。まだ5人が争っている。

「おい、工藤…お前…どこで仕掛けんねん？」

「バール、とつておきの仕掛け場所があるんだぜ！」  
そういうと、新一が一気に仕掛けた。

「あーっと、ここで工藤君が仕掛けましたー！ー！」  
「何っ！ー！ー！ー！」

先頭集団と十亀が驚いた。なんと150mを残して仕掛けてきたのだ。とつさに仕掛けたため、集団の4人はついていくことが出来ない。

そのまま…新一が一番でフィニッシュした。観客は大騒ぎだ！

以下、快斗、平次、中岩、街田とフィニッシュ。その5秒遅れで十亀がフィニッシュした。

「十亀のヤロー。やつば速いなオメーは」

「大体、中岩らが飛ばしすぎたからだろ」

そのような話をしていた横で新一が息切れの状態でこう言った。

「バール。レースに飛ばすとかスパートとかねーんだよ！頭を使うんだよ！」

そういうと3人は固まった。頭を使う…か…何か納得したような感じだった。

しかし、レースはまだ終わってわけではない。

そのあと、中津、後藤、持川の帝丹高校3人衆が続き、真もフィニッシュした。隼人も遅れはしたが、女3人組には追いつかれずにフィニッシュすることが出来た。その後ろでは…

「さあ、女性3人組はあと2周です。一体これからどうなるのでしょうかー！」

フィニッシュしたメンバーが話を始めた。

「おいおい、この3人ほんとにすげーよな。てかペース上がってねーか？」

「この3人、すごいですよね。」

「まったく、和葉のやつ。ほんまチキンなんやから…」

「蘭のヤツ。死にそーな顔してるぞ」

いろいろな話が第4コーナー付近であつた。

その間にも、順に辻、稲尾、平山、高木、米原とフィニッシュ。棄権メンバーを除くと、残りはあの女子3人組だけとなつた。

予想屋もこの展開にはびつくりしていたようで…

A：「なんだい。あの争いは…」

B：「先頭集団よりもすごいぞ」

その熱い戦いはいつしか、考えもない戦い。まさに鬼の形相の感じがするほどであつたのだ。

「さあ、この3人も後1週の鐘です！そして通過は…18分31秒！なんと89秒で回れば20分切れます！」

3人はまったく譲ろうともせず、しかしながら、ペースが格段に上昇していた。そして…残り250mで…

「あーっとここで佐藤さんが仕掛けました！後ろ2人はつくことが出来るでしょうか？」

「高木君、待つててよ…」

「迎えてくれるよね、新一…」

「平次：あたし、残り頑張んねんから…」

それぞれの思いを胸に、最後の250mに差し掛かった。

「おねーちゃんたち頑張つてー」歩美の音が響けば

「蘭、ラストよラスト！」と園子の声も響く。一方フィニッシュ地

点では、

「おい、和葉！ラストきかさんかい！」と平次の声が聞こえた。さらには

「さ、佐藤…さん…」と完全に疲労困憊状態の高木も佐藤の結果を気にしていた。

それぞれの思いが交錯する中、ラスト100mを迎えた。だが、ここで…

「えっ…」

佐藤が後ろを振り返ると…すでに蘭と和葉が横へ出ていた。必死につく佐藤。そして…

「今3人がフィニッシュ。これで5000mの競技が終了しました！」

3人がそろって倒れこむ。救護員も駆け込む。そして記録が表示される…

「1 1 16'48"69」これは、新一が一番でフィニッシュしたという証拠だ。

「す、すごい…おれ、こんなに速かったっけ…」

「すごいやんか、工藤！」

「おめでとう！」

全員から祝福されるやすぐに、胴上げをされた。そのころ…

記録係ではえらいことでもめていた。

「審判長！毛利さん、佐藤さん、遠山さんの記録が100分の1までも同じです！」

「なんだと！1000分の1ではどうか！」

「そ、それが…1000分の1までも同じなんです」

「 写判を呼べー!!」

そういうと、写真判定により順位を決定することになった。ところが審判一同、その写真に啞然となった。

「じ、これは…」

さて、記録発表

1	1	工藤	新一	1	6	,	4	8	"	6	9	
2	6	黒羽	快斗	1	6	,	4	9	"	1	0	
3	2	服部	平次	1	6	,	5	0	"	0	0	
4	2	3	中岩	剛史	1	6	,	5	0	"	5	2

∴

1	7	4	毛利	蘭	1	9	,	5	9	"	5	5	ムネ
1	8	8	佐藤	美和子	1	9	,	5	9	"	5	5	ムネ
1	9	7	遠山	和葉	1	9	,	5	9	"	5	5	

なんと、蘭は胸の差で2人に勝ってしまったのだ。

「オイオイ、なんだよ！ムネって！！」

「2人がかわいそう…」

「なんだって、毛利は巨乳で有名らしいから…」

そして、後で事実を知った2人にも…

「何で、胸で負けるのよ…」

「そんなん、ひどいんちゃう…蘭ちゃん、ひどいわ…」

完全に落胆していた。その後2人がどのような行動をとったかは…

( 写真判定のこと。陸上のトラック競技ではこの写真判定で順位を判断する重要な役割 )

## 思わぬ結果（後書き）

こんな感じで仕掛けませんでした、いかがだったでしょうか？

よろしければ感想等よろしく願います。

次回制作の参考にしたいので…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5712b/>

---

エンドレスレース

2010年10月9日02時29分発行